

# 令和7年度 標準的学力調査の結果

学校支援課

令和7年2月に実施した標準的学力調査（東京書籍版C R T）の結果をお知らせします。本年度からCBT方式（Computer-Based-Testingの略で、一人一台端末を使って解答する方式）で実施しました。

## 1 教科の平均正答率（％）について

※推定全国値…事前の調査により様々な指標値を取得した結果をもとに、推定した正答率

### 【中学校2年生・英語】

正答率

(単位%)		新潟市	推定全国値
教科全体		50.8	63.0
観点別	知識・技能	54.9	65.9
	思考・判断・表現	45.1	59.0
領域別	聞くこと	61.0	73.0
	読むこと	47.8	58.8
	書くこと	40.5	55.1

問題の内容ごとの正答率

問題の内容		新潟市	推定全国値
聞くこと	リスニング（内容理解）	80.1	86.1
	リスニング（対話文の内容）	48.0	67.7
	リスニング（様々な英文の聞き取り）	59.7	68.6
	語形・語法の知識・理解	39.6	50.1
読むこと	語彙の知識・理解	65.5	78.2
	さまざまな英文の読み取り	40.3	53.0
	長文の読み取り	52.7	62.3
書くこと	単語の並べ替えによる英作文	51.6	63.9
	場面に応じて書く英作文	26.7	42.8
	3文以上の英作文	23.9	44.3

教科全体の正答率が50.8％で、推定全国値を12.2ポイント下回った。観点別に正答率を見ると、すべての項目で推定全国値に届かなかった。中でも、「思考・判断・表現」が45.1％で、推定全国値を13.9ポイント下回った。

## 2 課題となる問題と指導のポイントについて

行きたい旅行プランについて、まとまった内容で説明する文を書く問題では、正答率が23.9％であった。問題の3つのプランには、聞き慣れない地名や語句に対して難しく感じる生徒もいたかもしれない。授業においては、英文を書くときに、「つながりのある文で」書くことが重要となる。例えば、「夏休みにしたことを3文

で書くこと」を例にとると、I went to Okinawa. I went to Nagoya. I went to TDL. のような事実の羅列ではなく、事実、具体的な内容、自分の感想、といったつながりを書くことができるように指導することが大切である。

また、このとき、生徒にとって意味のある文脈で取り組むことができるよう学習活動を工夫する。複数の領域を効果的に関連付けた言語活動を通して、生徒が学んだ言語形式を使うように意識するようにする領域統合型の活動も効果的である。中間評価では、よい点をフィードバックしながら自信を育むよう指導改善を図るとよい。

### **3 その他**

初めての CBT による英語の調査となり、各校では学級やグループ別にテスト時間を分割する、場所を分割するなどの工夫や、生徒にすべてのタブやアプリを閉じておく指示を出すなどの工夫を行った。今後は、生徒が CBT 方式でも資質・能力が十分に発揮できるように、ネットワークの状況を確認する、日ごろから英文のタイピング入力等に取り組む機会を設けるなど、工夫するとよい。